

鉄道の新保守管理技術の実証実験



最新の道路維持管理システムの3次元データを鉄道の保守管理に活用するための実証実験が伊豆急行で行われています。

実証実験は、日常の保守管理を最新の技術を使って効率的に行おうと、伊豆

急行で9月20日から始まり、27日報道機関にその様子が公開されました。

システムは、首都高速道路の維持管理をする「**首都高技術**」などが開発した道路の維持管理システムで、カメラやレーザーを駆使して3次元データを取得し、欠陥などを見つけ出すものです。

鉄道に開発された今回のシステムの実験では、カメラやレーザーなどの機器を搭載した列車が伊東市の伊東駅から下田市の伊豆急下田駅までのおよそ46キロの距離を時速30キロほどで走って計測します。

そして、基礎データを28日までかけて取得することにしていて、最終的にはこれまで作業員が行い、時間と経費を要した保守点検を効率的に行うことが期待されています。

鉄道版のシステムを開発した担当者は、「トンネルの点検では作業員が打音によって確認していますが、効率化が期待できる。実用化に向けて取り組みたい」と話していました。

伊豆急行の小林秀樹社長は「日本初の試みで、伊豆急行だけでなく、日本の鉄道の役に立つシステムになることを期待したい」と話していました。